

精神分析入門(上)フロイト

20060316オオシカトモコ

第 19 講 抵抗と抑圧

第1の経験

抵抗

我々が患者に、意識の表面に浮かんでくることを忠実に報告し、自分の見いだしたことにはいかなる種類の批判も加えないように厳命するのは、患者がこの分析の技法を良心的に守るか守らないに寄って、治療の成否、治療にかかる期間の長短が懸かっているからである。まずはこの基本原則に患者の抵抗が集中される。患者はあらゆる言い訳や手段で治療に抵抗する。(聖シュテファン教会の比喩)

この抵抗をうち破り、患者を技法上の基本原則にある程度従わせることが出来ると、抵抗は別の領域に移っていく。それは知的な抵抗となり議論をもって戦いを挑んでくる。我々は患者の一人一人の口から、科学的文献のなかで我々を取り巻いて合唱のように鳴り騒ぐあらゆる抗議と批判とを聞く。強迫神経症の場合、抵抗はその疑惑の中に引き退き、長い時日がかかったあげくに、よそよそしい態度にぶつかる。

「感情転移」という抵抗の手段。医師と治療とに対する抵抗の為に使用することに出来るような態度や感情の動きを、実生活から取り出してきて、これを繰り返す。患者が男性の場合、通例は、医師を父親の位置に立たし、医師に対して勝利を得ようとする意図が、病気にけりを付けようとする意図に取って代わる。女性の場合は、やさしい性愛的な調子の感情を医師に転移して、医師が女性患者の申し出をやむを得ず拒絶すると医師との個人的な強調を駄目にしてしまう。

この種の抵抗は分析の最良の手がかりになる。それは治療の目指す諸変化を防ぐために動員される自我の性格の諸特質、諸々の態度である。これらの抵抗を克服することが分析の本質的な仕事である。以前の催眠法では効果が当てにならず、抵抗を医師が認知できない。

新しい主題に近づいていくと患者の抵抗は強まり、その主題を処理している最中が一番強く、主題が解決されると抵抗も崩れる。彼の批判はそれ自身尊敬すべき自主的な働きではなく、感情的態度の召使いであり自分の抵抗によって指揮されている。

状態の変化に反抗する強い力は、かつて強いてこの状態をつくり出したのと同じものに違いない。症状はあるところで停止してしまったものの代理。問題の心的過程が意識に上ってくることに激しい抵抗が起こるので、それは無意識のままに留まった。無意識的なものだからこそ、症状を形成する力を持っている。そのような抵抗によって示される病因的な心的過程を抑圧と呼ぶ。

抑圧

ある衝動に退場命令が出されるのを知っていると、その衝動は無力になるが、記憶として存在し続ける。

ひとつひとつの心的過程は、はじめは無意識の心的組織体系に属しており、事情によっては意識の心的組織体系の中に移っていくこともある。(写真のネガボジの比喩)

無意識の組織体系を控え室に例える。続く第二の部屋のそれよりも狭いサロンには意識も座っている。ふたつの部屋の敷居には番人がいて、気に入らないことをするものはサロンに入れない。この無意識と前意識の間に立っている番人は、あの夢の形成時に受けた検閲である。前意識的材料が睡眠状態で、抑圧されている無意識的な願望の活動と共同して、そのエネルギーで潜在夢を形成する。無意識の体系下で圧縮と移動がなされる。

症状は抑圧によって阻止されたものの代理物で、抑圧がいかなる動機によるものかは、自我の諸力、既知の潜在的な性格諸特性から発するとしか、今のところわかっていない。

分析をする毎に我々は患者の性的な体験と願望とにぶつかり、彼らの症状が性的願望の充足という意図に奉仕しており、その諸症状は実生活で彼らが手に入れることが出来ずにいる性的満足の代理物である。(第一例の夫人)

これらの主張の普遍性は、感情転移神経症というグループ、すなわち不安ヒステリー、転換ヒステリー、脅迫神経症の3つの型に即してえられた。罹患の諸誘因は、彼らは現実がその性的願望の満足を許さない場合、何らかの仕方での欲求阻止のために病気になる。

症状は性的満足を意図するか、性的満足の防衛を意図するかで、ヒステリーの場合は積極的な願望充足、強迫神経症の場合には消極的禁欲的な性格とすることができる。症状は相反するふたつの志向の相互干渉から生じた妥協の成果であり、ヒステリーの場合はふたつの意図が同一の症状でぶつかり合い、強迫神経症の場合にはふたつが離ればなれになり、相殺しあい時間的に相前後して現れる。

これらの症状は性の代償的満足を極限まで拡大されているが現実的な満足を与えない。



第20講 人間の性生活

性的なものとはどういうものか。性行為という事実を中心において考えれば、快感をうることを意図して、異性の肉体、性器領域に関心を寄せる一切のことと思われるが、おそらく「境界線のひき方のずれ」という結果を生ぜしめたようなことが起こったのではなからうか。(性的倒錯者の例:同性愛者、代理器官での性交、フェティシズム、サディスト、マゾヒスト)

これらの性的倒錯の可能性と、正常な性愛に対する性的倒錯の関連とに理論的な説明が必要である。

ひとつの知見は、イヴァン・ブロッホに負っているもので、このような逸脱や性的対象との関係の弛緩は、昔から全てに時代に見られ、時として一般に容認されていた。これらを「変質兆候」とすることを修正する。

(イヴァン・ブロッホ Ivan Bloch (1836-1902) Poland 銀行家、鉄道事業家。近代の工業化された戦争問題についても研究。邦訳著作:新版世界性医科学全集第8巻 性愛の科学 ヒューマンライフ社 1981年)

分析診断の際になされたひとつめの経験。「性的満足」の中に倒錯欲求の満足も含まれる。同性から対象を選び出すことを恋愛生活の一分枝と見なさざるを得ない。パラノイアについては強すぎる同性愛的な衝動を防ごうとする試みだと仮定している。ヒステリー性の神経症では症状を全ての器官系統に表すことが出来、あらゆる機能に障害をきたすことがある。その際、性器を他の器官で代理しようとする、衝動が発現する。強迫神経症の症状のうち重大なのは強烈なサディズムの衝動で、願望を防ごうとするか、満足と防衛とのあいだの闘争を表現している。穿鑿型は、接触恐怖や洗浄恐怖となる。正常な性的満足に対抗する傷害がない場合よりも、このような「側枝性」の逆流停滞がある方が倒錯的な欲動が強く現れる。顕在性の倒錯は、性本能の正常な満足にとって、一時的な事情とか永続的な社会制度など大きな困難が生じてくる時に、誘発、活発化される。

ふたつめの経験、倒錯的性愛は幼児性欲が拡大されたものである。思春期に目覚めるのは生殖機能である。社会が、幼児が知的に成熟してある段階に達するまで、性の欲動の発達を引き延ばそうとするのは、性の欲動が完全に発現してしまえば、教育の可能性も終わりを告げてしまうからである。そうしなければ、この欲動があらゆる堤防を決壊し、辛苦してうち立てた文化を押し流してしまうからだ。社会はその成員の数を制限し、そのエネルギーを性的な活動から労働へと振り替えなければならない。子供の生活を性的なものにつくりあげるという理想の目標がたてられた。子供たちはこのような便宜主義にはかまうことなく、ありのままにその動物的権利を主張する。多くの人の場合、性欲のない幼児期という先入観に最も激しく矛盾する幼児期を健忘する。このヴェールは分析的研究や夢の形成によって剥がされる。

リビドー、欲動を発現させる力、は飢えと似ている。乳児の乳首をしゃぶる動作は性的な性質を持つ。口及び唇部位の興奮に関連させて考える。この身体部位を催情部位と呼び、しゃぶる行為によって目覚めた快感を性的な快感と名付ける。乳児の乳房を吸う行為は人生の二大欲求を同時に満足させている。性の欲動の最初の対象としての乳房が、後年、転化されたり、代償されたりしながら影響を与える。幼児は自分の指や性器で代理させる。幼児の性欲は有機体の大きな諸欲求の満足に依存し、自体愛的に振る舞う。最初に外界が快感の追求に敵意を持った阻止力として乳児に逆らうが、乳児は自分の糞便に対して嫌悪感を持たず、「贈り物」「お金」と評価し、自分の排尿行為を特別なほこりを持って眺めているように思える。同性愛者、異性愛者を問わず、多数の成人において肛門は膣の役目を引き受けている。幼児においては、性欲を生殖機能たらしめるものではない一方、生殖という目標を捨て去っていることは全ての倒錯に共通している。性生活の発達の断絶と転回点とは、性生活が生殖という意図に従属せしめられるところにある。この転回以前のことは倒錯と名付けられ追放される。

幼児の性探究について。男児は女児の大事な部分の欠けていることを発見して恐れを持ち、大人から脅かされて去勢コンプレックスになることがある。女児はその欠けていることから、男児をうらやむ。女児が一人前の女になるには、陰核がこの過敏性を、適当な時期に完全に、膣の入口部に譲り渡すことが重要である。

幼児の性的関心は、最初は、赤ん坊はどこから来るのかというスフィンクスの設問の根底にある問題に向かっている。どの幼児たちも、赤ん坊は糞便と同じようにでてくると考える。多くの場合、思春期前期に不完全な説明を受けるが、この説明が外傷的作用を及ぼすこと



もめずらしくない。

我々は、精神分析において、性愛、性生活の概念に正当な範囲を快復したにすぎない。

Art Works: Marlene Dumas